

# 濁源集

和書門  
二五  
四  
七五  
九  
四  
四

48  
庫文閣内  
二五  
四  
四  
九  
架册號

和歌

内閣文庫	
番號	和 25459
冊數	4 ( 1 )
函號	201 48

201-48



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



書齋  
銅印

日  
本  
書  
齋  
銅印

淺草文庫

和學  
銅印

銅印

*[Faint handwritten text in blue ink, likely bleed-through from the reverse side]*

久保

久保三年後宇治院の御事

御事

是等の御事とある所の御事とあるは

後村上院御事

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

入る御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

御事とある所の御事とあるは

<sup>勢子口</sup> 時より波をいづれに新玉吐まね  
袖のまの心をゆせまじ

法皇御詔

<sup>勢子口</sup> 心河の勢をてまほしうしらすの  
入る武部つのみこつ子りり

亦く 大中佐徳宣

<sup>松葉</sup> りせまのまをくまふしれて萬の  
心河院のつらまの

大納言公實

<sup>勢子口</sup> 子りり二葉のまをらよまのつらまの

心河院のつらまの

待賢門院河

<sup>子口</sup> とまのつらまのまをらよまのつらまの  
雲中子りとりのまを

出清門院御詔

<sup>勢子口</sup> まのつらまのまをらよまのつらまの  
仁和のまのつらまの

出清門院御詔

<sup>勢子口</sup> まのつらまのまをらよまのつらまの  
心河院のつらまの

心河院のつらまの

雪の人の心くはるきく橋へはまき入るれぬ心

あま茶を侍る小舟

くまの松まじりてはるきく人の心くはるきく橋

河内院の清守のきりきり

しるしりりきりきりのきりきり

源の物位

春日野の雪をまじりて橋をへくきりきり

陸子の繪の雪をまじりて人の心くはるきく

橋へまじりてはるきく

都芳の院安藤

ゆのいづれくはるきく人の心くはるきく

千のいづれくはるきく

中納言

ゆのいづれくはるきく人の心くはるきく

私をまじりてはるきく

天上の星

ゆのいづれくはるきく人の心くはるきく

あまきりきり

ゆのいづれくはるきく人の心くはるきく

正徳二年はるきく

後千代上  
後醍醐天皇  
後深草院  
後花園院  
後伏見院  
後醍醐天皇  
後深草院  
後花園院  
後伏見院

惟解親王

後醍醐天皇  
後深草院  
後花園院  
後伏見院

兼大納言為氏

後醍醐天皇  
後深草院  
後花園院  
後伏見院

後深草院

後深草院  
後花園院  
後伏見院

後深草院

後深草院  
後花園院  
後伏見院

後深草院  
後花園院  
後伏見院

後深草院

<sup>形の上</sup> 有ハ杉蔵よりと後入く雪けり星々の光の

あり大信子信のけり雪海子云らぬ

弄り命一信のけり雪海子云らぬ

へふひね

<sup>形の上</sup> 主心つと又とさるる雪はれぬと云く教雪

ま下海雪としる事な信の

り

<sup>けり</sup> 洗きぬ何れとまくと雪代の雪子と云らぬ

千ぬらぬ雪の台く雪雪

並大納まかた

<sup>けり</sup> 花の雪蔵の標せりらぬと云く雪子と云らぬ

心さら雪のけりつりく

順徳院 浄教長

<sup>形の上</sup> 音海河心とまのけり雪海子云らぬ

心さら雪のけりつりく

式子内親王

<sup>形の上</sup> 心さら雪のけりつりく

心さら雪のけりつりく

院 浄教長

<sup>形の上</sup> 長い雪のけりつりく

雪の雪雪

享治二年後河海院より  
書しむるがた

権大納言為氏

後子末上  
河海院の由りましの物なるは、このころの  
河海院の書しむるがた

後系十太後

建保三年同書詩書台

野外處 参議雅經

後子末上  
書しむるがたの書しむるがたの書しむるがた  
の書しむるがた

義久、元春、内中書長、西書台

野徑處とて書す

順徳院御書

元  
附口處に末野子以人の書しむるがた

中納言多岐

後子末上  
の書しむるがたの書しむるがたの書しむるがた  
の書しむるがた

権大納言義經

元  
の書しむるがたの書しむるがたの書しむるがた  
の書しむるがた



後丸茶茶田大信

信 志のりわあ海のしげのき近人まとのあ

実妙のあり奇合くまの  
心なよりの 大物不教母

今 物みんどののまのうーとくとんこのて  
おしー心なよりの

大宰大貳長美

信 志のりわあ海のしげのき近人まとのあ

大納ま為兼あし奇合  
あし奇あ物な

中納言為相

信 志のりわあ海のしげのき近人まとのあ

建武二年内事表して人くま

あし奇あ物な 中納言為相親王

あし奇あ物な

后京極坊政大信

信 志のりわあ海のしげのき近人まとのあ

守光法親王あし奇あ物な

後徳大寺の御書

近法師

信吉のまの巻に廣くは是里小野の巻の  
御書清浄の中の

後高野院浄書

足波の村の物に少く民の御書  
御のこころ詩を傳へて清浄の中の  
御のこころ御書とて御書

足波の村の御書に少く民の御書  
御のこころ詩を傳へて清浄の中の  
御のこころ御書とて御書

後京師隆物信

建長三年詩書を合ふ御書  
御のこころ御書とて御書

参議高氏

御のこころ御書とて御書  
御のこころ御書とて御書

後徳大寺の御書

<sup>妙法蓮華</sup> かの<sup>の</sup>法<sup>の</sup>處<sup>の</sup>よ<sup>の</sup>に<sup>の</sup>入<sup>り</sup>を<sup>し</sup>て<sup>の</sup>入<sup>り</sup>の<sup>の</sup>行<sup>の</sup>の<sup>の</sup>

東<sup>の</sup>津<sup>の</sup>五<sup>の</sup>十<sup>の</sup>中<sup>の</sup>一<sup>の</sup>、  
後<sup>の</sup>多<sup>の</sup>相<sup>の</sup>院<sup>の</sup>津<sup>の</sup>部<sup>の</sup>

<sup>妙法蓮華</sup> 此<sup>の</sup>子<sup>の</sup>内<sup>の</sup>親<sup>の</sup>王<sup>の</sup>

東<sup>の</sup>津<sup>の</sup>五<sup>の</sup>十<sup>の</sup>中<sup>の</sup>一<sup>の</sup>、  
後<sup>の</sup>多<sup>の</sup>相<sup>の</sup>院<sup>の</sup>津<sup>の</sup>部<sup>の</sup>

東<sup>の</sup>津<sup>の</sup>五<sup>の</sup>十<sup>の</sup>中<sup>の</sup>一<sup>の</sup>、  
後<sup>の</sup>多<sup>の</sup>相<sup>の</sup>院<sup>の</sup>津<sup>の</sup>部<sup>の</sup>

一の書しつる事

兼中納言

<sup>妙法蓮華</sup> 此<sup>の</sup>子<sup>の</sup>内<sup>の</sup>親<sup>の</sup>王<sup>の</sup>

兼中納言

<sup>妙法蓮華</sup> 此<sup>の</sup>子<sup>の</sup>内<sup>の</sup>親<sup>の</sup>王<sup>の</sup>

兼中納言

〇つとてまゝに申入るゝとてつゝのいふまゝのいひ申すべし

宗をよからずしむる心いひの宮のまゝ

合しよる 縁しゆきし物信

ときつらまのひみもさまられしとて入のさま

建保四年内申事書台

順徳院清教

つる夢のいづれを花とまふとてつゝ抄神小入

位もかまへしつらあ人のせのい

とく曹中梅とて入新むをつゝ

つるつらつゝ

とて天の

抄してとて花とまふれ梅入もかまへ色をまふ

賢翁社もまのげらつらまのの中

梅を信ずるげら

里の后まらま後成

色をのまひいひのつらとて梅入もかまへ梅の相え

茶中近中梅翁感家の書台

茶中期言定家

抄神もかまへしつらあ人の花もつらとて

賢翁重保もまのせのげらつら

梅を 宗道法師

玉葉上  
深の袖入小の梅花をそとく色日  
美の香もすつ傍のけりの中日

梅を 藤原冬経

梅をいささしくわると梅のけりつる袖をそとく  
嘉元三年十一月のけりつる

梅を 大納言の世

本末のけりつる梅花をそとく小の香も

梅を 山階入房

とりの心梅 山階入房此大信

梅のハ花のきつる小の梅花をそとく色日  
梅花をきつる心梅の傍のけりつる

梅を 源後頼朝

心梅をいささしく梅花をそとく小の香も  
正治三年十一月のけりつる

梅を 中納言

少の梅をきつる心梅をそとく色日  
中系後時

梅の香を梅の心梅をそとく柳の枝をそとく  
心梅をいささしく梅花をそとく



千早子 中子

中野 宗良親王

花のさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

あつちよる梅の花のさきさき

ねよのつ 伊勢

とくを人の花の清とつらあいらるるるるる

千早子 中子

右 藤門 夢通男

梅の花は袖の白くさくさの雪の月

皇太后 宗良親王 後次女

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

守 宗良親王 中子

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

友 宗良親王 中子

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

友 宗良親王 中子

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

梅の花はさきさきとて梅の花はさきさきの雪と

凡書上

を子内親王

之をわけて月の新く白の枕に梅くわすの新の

志のをこ平の可も多のをのりの時は

去月 入る 並大 政大 信信

吾のしと心のつげし去の月梅の宿のハ信子子

可も多の平の可も一の時は一の心は

源俊平

月の新のの去の心のあくの心のいのりのと

弘長 元年 一の可も多のをのりの時は

かの一の心は 並大 納言 為氏

凡書上

見のしと心のつげし去の月梅の宿のハ信子子

可も多の平の可も一の時は

源果親

難波の心のあくの心のいのりのと

又集 嘉陵 去る 詩不 明不 時は

勝の月と心のつげし去の月梅の宿のハ信子子

大印千里

下の心のつげし去の月梅の宿のハ信子子

千の可も多の平の可も一の時は

二條院 讚波



<sup>彩物上</sup> 白文の大名人の玉のついでそりしく  
夾路柳敬名といふ事な 柳の系

華園白牡丹信

<sup>彩物上</sup> 枚のしほ柳のまゝハ証し人くみふのしほのまの  
建仁元年三月寺台日展隔 通修

き樹といふ事な

権中納言久経

<sup>彩物上</sup> めのせは信六田の後の柳系をいふまゝくまを  
柳を信物といふ

伊勢

<sup>彩物上</sup> 善柳の枝のしほのまゝ雨ハ系ゆてつめくまの  
延文のまゝ寺の

等持院贈牡丹信

<sup>彩物上</sup> 雨しほく家の玉のまゝ柳のしほのまゝの系  
まゝ寺の中

権中納言久経

<sup>彩物上</sup> 雨しほく柳のまゝハしほのまゝのまゝの色を  
存まゝ雨といふ事な

九条牡丹信

<sup>彩物上</sup> つしほくといふしほのまゝのまゝの雨の枝を  
これと満き

閑中書兩とし入事ね

大傍正秋交

つくと書たつたの御...  
御一新とて...

御一新とて...  
御一新とて...

閑中御書交

書雨よ木...  
書雨よ木...

侍政大政大信

と...  
と...

守は法親王家の入り...

小 坂東は...

弘長二年...  
弘長二年...

引つて...

別々...  
別々...

おの...  
おの...

見つか...  
見つか...

権中御言事信

おの...  
おの...

物于表上

まゝに申すに、この書は物長れ世傳傳るべし  
心も平しよるべし

後千口

おつゝいふに、後千口の書は、  
伊予守をよめる

ほ松口

後千口の書は、  
津島守をよめる

ほ口

後千口の書は、  
中納言をよめる

物口

後千口の書は、  
伊予守をよめる

ほ口

後千口の書は、  
出津守をよめる

物口

後千口の書は、  
素直法師をよめる

物口

後千口の書は、  
後忠法師をよめる

<sup>傳</sup>入のわさめむむのまふみくろく  
者中  
者中

大防正意録

雲雀也 大納言為子

後二位家隆

少少院尾張

あしき人のまのト  
あしき人のまのト  
あしき人のまのト  
あしき人のまのト

後二位家隆

あしき人のまのト  
あしき人のまのト  
あしき人のまのト  
あしき人のまのト

大納言為子

あしき人のまのト  
あしき人のまのト  
あしき人のまのト  
あしき人のまのト

大納言為子

少少院尾張

物初書上

伴日花のともなひさきしとて笑入る人々  
建仁元年八月廿三日の御書

瑞花 後東播磨改前大政大臣

物初書

影らき 源頼政 三子の御書

神書

深山木のその梢とてさへる花の影 花の影

物初書上

神のいみじりの様候を人々笑ふ 花の影

前大納言の世に世に傳へ給

春日社亦そ書

民部卿の書

あまのい花の影の多き御書 花の影

建仁元年後多御院の御書 花の影

春日台の 宗道法師

物初書

あまのい花と雪とを埋れし花の影 花の影

順徳院御書

物初書上

雪とのこころのいみじく書 花の影

影らき 後東播磨御書 花の影

多岐松葉下

小川の世の花の夢のぬかの河を流す

源氏物語 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

げんごよりの 秘眼法師 多岐松葉

志野川あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

建仁元年二月は高野院 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

参議雅経

色は雲をまじりては成るまゝのれ 多岐松葉

多岐松葉

新らと 入る雲は政大信 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

あふりせの夢の原のまゝに雲の影の花 多岐松葉

浮世 朝天子 望津 望津

手紙下

一ノヒシノ雲井ノ様  
名

中院入居一品

吉井ノ雲井ノ様  
日吉社人入居ノ御清

ナリノ世ノ御

後鳥羽院御清

吉井ノ雲井ノ様  
正平八年同春  
社人入居ノ御清

手紙上

小治政ノ代色ノ御  
又中官年同春

社人入居ノ御清

権中御清

吉井ノ雲井ノ様  
花井ノ御清

後鳥羽院御清

花井ノ御清  
後鳥羽院御清

伊勢御清

けいしとさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

夢中納言定海

夢中納言

元々過ぬ花のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

和歌西条の合中花と

いふ事な 友系雅經

口上

さきさきと花のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

かやいふを 後西園寺入房兼光

後西園寺

後西園寺入房兼光のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

あはれぬ事合し

二品法親王仁養

夢中納言

夢中納言のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

夢中納言のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

夢中納言

夢中納言のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

花のさつての中

夢中納言定海

夢中納言

夢中納言のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

夢中納言のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

源後頼朝信

千代

源後頼朝のさつての園をよもしく花  
のゆくもあわく後徳のけり

とくし



平忠度物ほし里の花は  
げりもあつとばあつととく  
なれもあつとくまの物  
らうてほのーまーか  
て物るげりもま

小侍後

<sup>ま</sup>あとのひなはか  
千あひあま

皇太后

あまのひなはか  
あまのひなはか

花のさるは西園寺

後世より

あまのひなはか  
あまのひなはか

禁中

皇太后

あまのひなはか  
あまのひなはか

あつりつたそこの花を題して弄  
よのとがめ世にこそまをれし

伊勢大輔

古のりくの初の人さくらさくらさくらさくら  
古のりくの初の人さくらさくらさくらさくら

後人

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

民部卿成範

あつりつたそこの花を題して弄

伏見院浄教

花のうらのなれりさくらさくらさくらさくら  
花のうらのなれりさくらさくらさくらさくら  
相坂の雲さくらさくらさくらさくら  
相坂の雲さくらさくらさくらさくら

母舅之

常もさくらさくらさくらさくらさくらさくら

後人

あつりつたそこの花を題して弄

建保二年内市表詩弄を合

あつりつたそこの花

茶中細文定家

かふ河まのいっせに散れく花をさきまのしせの  
勝る口

花の色のやうにぬあやうのすく小あや  
え亭の年ほ亭多院のすれ  
うらの河を

法不長衆

祭人の神小あやしきりりめのおのの花の  
花より當とり入事な  
まのうら

雲々入付つじ花のえきあく本つ入まの當  
あけり

亭子院 亭台

えあ

頼進と花のえをえ入るらぬさき一の當の  
勝る口

高陽院の花さきあ志のいへ東

あひ山の花見ゆまらてくれい亭信

茶中改大信さつひくびかた

しる亭のよみくつらとせく物く  
えいはいさくの中ゆあくう人き  
亭かひ信物うとくみくわんまら  
とく信物ひる 能因法師

ほかに

あつちを思ひまじしゆれをよと花の

思をよせては政大信いと長し

としいては物かちて物かち

かんじいり

しきさの院ゆく様をゆく後

世系業平物語

世中ゆく人の様のかるは長き世の

千ふらぬ事

新大徳正徳

まの心ししゆ何のせん人々

成る

様の花のまの心しゆ

りかたの心しゆ

後人

あつちをかちてはそれ様花を

りかたの心しゆ

あつちをかちてはそれ様花を

徳正通眼

惟るのみこ

様花の心しゆをよと古里人の

花の事の中

園白牡丹

牡丹

花の里へいとほしきしられといふ  
弘長元年(1170)の事なり

牡丹

花の納るる家

牡丹

すういらりては山梅の花のまをけりて

花の青きけりて

後京極坊政善大政

牡丹

花のみの庭の座を移しと雲の色つく山

花の

花の納るる家

牡丹

高砂のまのみもいれりては花の色

牡丹

花の

花の

花の

花の

花の

牡丹

花の

花の

牡丹

花の色は

花の

冷泉入る花



さくららの花のしらねより

心こころのさくら

久ひさの老のちのさくらのしらねのよりのさくらの花はな

山やま里のままのさくらのしらねのよりのさくらの花はな

能因法師

山やま里のままのさくらのしらねのよりのさくらの花はな

花はなの香かほとさくらのよりの

源仲經

山やま探のしらねのよりのさくらの花はな

新あらたらむと 西にしの法師

かかつつししととくく花はなののしらねのよりのさくらの花はな

二ふた品しん法ほ親しん王おう花はなののしらねのよりのさくらの花はな

山やま探のしらねのよりのさくらの花はな

花はなののしらねのよりのさくらの花はな

後鳥羽院ごとよはのいんののしらねのよりのさくらの花はな

山やま探のしらねのよりのさくらの花はな

山やま探のしらねのよりのさくらの花はな

山やま探のしらねのよりのさくらの花はな

亨子院 弄子台

つら 梅香

梅松葉りる木のト尾ハきうして花さくらの世ぬ雪  
心なき弄子のさけし時落し花さくらね

津 家長

山人おぼろの妻木の遊場おぼろつれとかりき花

花雪

中野 輝宗 良親王つら

つれい花さくらのみりしのみさめいなる花さくらのわ

春落し花としんを

友系 教定 物語

梅松葉れぬ梅を冬おぼろのけりけりき春の花

春の弄子の中

新 参 議 為 相

まのめ 峯の梅をくけりきまのえりき

又 保 心 弄子 物語

六 条 内 大臣

梅松葉のつらしるいさうしの花さくらのけりき

新 一 郎 忠 侍 親 子 物語

梅松葉のち花さくらのうみわのこころしきさくら

不 十 三 弄子 物語 中 湖 上



花

宮内卿

抄巻下 花ささるしらゆ山姥のまの浦の母の縁

千又(百)歳壽(台)

多々議雅經

抄巻下 山姥のまの浦のまの浦の母の縁

花の壽の中

よみ人

抄巻下 花のまの浦のまの浦の母の縁

東文雅院にて撰の花のみ

いふはらふかかれけつをさくしつ

まの浦のまの浦

抄巻下 花のまの浦のまの浦の母の縁

雨を落し花を

花の中納言法雅

抄巻下 つくと雨のまの浦のまの浦の母の縁

花の壽の中

式子内親王

抄巻下 花のまの浦のまの浦の母の縁

花の壽の中

源仲光

後は下

院人の宿中一人一様花られハリ等々の教

千三三季のされ一様花の

心花 清一

あへくのほね、あつと様花らるるそ人

任吉社中後くもあけつるのゆか

一ひ花 源經氏

あつとくせぬ花とハ、さしあつひあつる花

物落花を

ほろ我大政大臣

と物ハ又れ、とめむじ様中くゆ

落花の、あり

六部卿成親王

あつとくせぬ花とハ、さしあつひあつる花

千三三季の

七色中物と云

あつとくせぬ花とハ、さしあつひあつる花

春の櫻のちのちとくほ花のあつ

けつと、つてよのつ

前大傍正親源

あつとくせぬ花とハ、さしあつひあつる花

正治二年五月一日

新大納言忠良

跡目下

此の御のまはゆめり花をさへ志しとて三女

新大納言 順徳院 津守

二世の三女

跡目下

花ののかりしまのまのひとて廣く心むるの

守是法親王よりさす

よせゆめり

新大納言 忠良

跡目下

此の御のまのひとてさす

新大納言 忠良

よせゆめりのま

新大納言 忠良

跡目下

此の御のまのひとてさす

苗代を 儀子内親王

うらぐ

ワケ

探りし下あを家かき花は流るる小田の

新大納言 忠良

カミイ

新大納言 忠良

跡目下

花はあつたのたれを家とくまをく

新大納言 忠良

田のま

新大納言 忠良

跡目下

此の御のまのひとてさす

の尾

長久二年弘徽殿女御御崩  
谷間の川をよりの

高蓮法師

みづもさくもさくを<sup>高松下</sup>の詠声ゆききそも<sup>丹白の存</sup>  
類冬 二品法親王為<sup>丹白の存</sup>流  
あまきいしぬさくあさる人のつみの後<sup>丹白</sup>  
すの川のあふのゆるかの<sup>丹白</sup>農  
さくらげをよりの

ついで

若野川への心あさる<sup>丹白</sup>河をここの<sup>丹白</sup>転入  
あはれ

二品法親王守茂御崩  
丹白

後山と丹白の玉河屋流<sup>丹白</sup>入る<sup>丹白</sup>  
丹白の河

順徳院御崩

河<sup>丹白</sup>の流と秋なる御崩と<sup>丹白</sup>紫の落き色つる心<sup>丹白</sup>  
類冬をよりの

長谷川藤原氏

丹白  
丹白の河をよりの<sup>丹白</sup>  
衣笠河大石



後醍醐院御長

御長下  
心わつて安んずらんまこと母教受けるは清く  
花を待たせける

中務卿親王

御長下  
母の心をわつたてて花を待つては清く  
出陣の内に大信を奉り合は  
兩中花を並中納言定家  
務松  
志のく程神のくやる花をまゝに  
かきこむよりの

神祇伯孫仲

御長下  
母の心をわつたてて花を待つては清く  
出陣の内に大信を奉り合は  
母を花をよりの

南無阿弥陀仏

御長下  
母の心をわつたてて花を待つては清く  
影をらと並中納言定家  
建仁元年秋供所合はあま

御長下  
母の心をわつたてて花を待つては清く  
神祇伯孫仲

千代の御手合

二條院講波

玉葉下 枝のしる花のそよの葉の緑の入れの葉の  
暮春の雨とよみ事な これ治

新大納言才女

けい 花の枝の下の陰影のそよの葉のしるの葉  
暮春の雨とよみ事な これの夜

後三位雅家

彩葉下 花のしる何のそよの葉のそよの葉の  
陰影のそよの葉の これの夜

こころの暮春の雨とよみ事な

つゆのそよの葉の

新大納言才女

彩葉下 花のしる何のそよの葉のそよの葉の これの夜

三月の暮春の雨とよみ事な

千代 花のしる何のそよの葉のそよの葉の これの夜

暮春の雨とよみ事な

後村上隆御家

彩葉下 花のしる何のそよの葉のそよの葉の これの夜  
暮春の雨とよみ事な これの夜

新大納言才女

後下  
しらべの花をさししりあつらぬ信をまて

数系信実物信

分又花の陰をぬのちれどくれが、しりあつらぬ

亭子障の弄谷しりあつらぬ

の翫 みる

うまのこまをぬのちしりあつらぬ

の翫 みる

抄改大改大信

あやうい志の花をぬのちしりあつらぬ

屋上つらぬ

花の信をぬのちしりあつらぬ

の翫 みる

ぬれつそ志をぬのちしりあつらぬ

の翫 みる

ぬれつそ志をぬのちしりあつらぬ

後下



夏衣

首衣を 後伏見院御寄

此衣 夏衣の袖の縁をききよめしむるに

夏衣を後伏見院御寄

夏衣の縁をききよめしむるに

此衣 夏衣の袖の縁をききよめしむるに

夏衣の縁をききよめしむるに

此衣 夏衣の袖の縁をききよめしむるに

夏衣の縁をききよめしむるに

夏衣の縁をききよめしむるに

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

杉原  
まゝのしるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

杉原  
山宗徳院のしるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

まのしるしの青

友系家法物信

千代  
あつてしまの別名は人のしるし  
しるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

中務卿系法物信

杉原  
まのしるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

志留山

杉原  
まのしるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

中務卿系法物信

杉原  
まのしるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

まのしるしの青

源邦長物信

杉原  
まのしるしをいひてあり人の衣の色はまゝ  
まのしるしの青とく後竹ひら

まのしるしの青

内大臣

今更

意とらぬかきつゝのうらたに杜宇の秋の秋の秋

いふ

いふせんこぬあわすの富貴もくく人の  
慕えん心もすもるけりつむ

善大納言の世

あつ

あつ入き心のうらた村雨のうらたのうらた  
心もすもるけりつむ

式子内親王

あつ

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた  
入るのうらたのうらたのうらたのうらた

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた

あつ

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた  
建武二年丙申年千々すもる中

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた

正三位のうらた

あつ

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた  
久安のうらたのうらたのうらたのうらた

皇太后のうらたのうらたのうらたのうらた

あつ

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた  
あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた

あつて雲のうらたのうらたのうらたのうらた

影らと 大納言経信  
一と忠と影とときば子祖衣つてまゝして  
おとさきとせよりの

権傍正承縁

きつしひのつじれい子祖のりえらつひの  
民部卿光宗  
きてていさしきつれつれつらつと何ん  
影らと 傍人らと  
杜宇かつ鳴里のわまらつれつらつと何ん  
千又つらぬ奇台

権中細言上経

郭不程くつれぬむかつかつあつ里のつとつ  
嘆空つらとつ人影むを傍の  
子祖つつらつを述べつらつとつらつ  
建武二年内裡つらつとつらつ  
つらつとつらつとつらつとつらつ  
つらつとつらつとつらつとつらつ  
郭不程くつらつとつらつとつらつ

時を待たずして

新大改大信

おとぎの物語の山の上の山の中へ

新大改大信 仁和寺二品法親王

郭不才の花山子

喉郭不才の心

新大改大信

おとぎの物語の山の上の山の中へ

新大改大信 仁和寺二品法親王

郭不才の花山子

新大改大信

おとぎの物語の山の上の山の中へ

郭不才の花山子

新大改大信

おとぎの物語の山の上の山の中へ

郭不才の花山子

新大改大信

おとぎの物語の山の上の山の中へ

郭不才の花山子

おとぎの物語の山の上の山の中へ

海邊部へといふ事を後傳の  
りつ

形なき 二一と云ふと、山子習しつおわりのとて  
部へ下りてとてしつ事な 成り

中細え進言

形なき 中細のりつ、この法のかのりつ、このりつ、  
りつ、らと、この法親王とて 成り

成り りつ、らと、この法親王とて、  
葛蒲を後傳のりつ 成り

權中納言へ雄

成り 中細のりつ、この法のかのりつ、このりつ、  
ち大は中細のりつ、  
ちのりつ、このりつ

大中は輔弘

成り 中細のりつ、この法のかのりつ、このりつ、  
は高相院のりつ、  
りつ、

成り りつ、  
幾つ、  
す夏つ、  
りつ、

後東條松政並大政大臣

雨あめの物ものの来きに乾かえくわののちとつる夜よの

寧なや治ち （心まき） 祈いのり （つら） つら （ま）

早はや苗なえ （ほ） 山やま院いん 浄じやう 寺てら

足あし先さきの山やま田での早はや苗なえ （ほ） 山やま院いん 浄じやう 寺てら

新あらたらと （よ） 人ひと （し）

又また月つき初はつ花はな播はの香かね （つ） 人ひとの神かみのつと

郭くわく不ふ在ざい （し） 花はな播はの （つ） 人ひとの （ま）

坂さか系けい 家け 隆たか 物もの 信しん

又また （し） 花はな播はの （つ） 人ひとの （ま）

不ふ （し） 在ざい （ま）

權中納言經高

昔むかし （し） 花はな播はの （つ） 人ひとの （ま）

又また （し） 保たも （ま）

權中納言久宗母

思おも （し） 入い （ま） 昔むかし （し） 花はな播はの （つ） 神かみの （ま）

心こころ （し） 祈いの （ま）

兼内大臣仲

播は （し） の （つ） 後のち （ま） 心こころ （し） 祈いの （ま）

兼大納言忠良

播は （し） の （つ） 花はな （ま） 心こころ （し） 祈いの （ま）

式子内親王

人のまゝなまをしとていねいなるのまの物せしめ  
影一らと 皇太后より後成女  
横少のりあつたのうたはまを昔の初め  
心より清く静くの中

玉清門院清浄

昔をいへば花梅のまゝいそんり末なる社の  
影一らと 古清門院通男  
以来をいへばあつたくたつたあつたあつたの梅  
皇太后より後成

これ又花梅のまゝいそんり末なるのひとと成

後法性寺入る花梅の影一らと

よき世のりあつたあつたあつたあつた

影一らと 影一らと 影一らと 影一らと

影一らと 影一らと 影一らと 影一らと

皇太后より後成

又月雨のまゝいそんり末なるのひとと成

影一らと 影一らと 影一らと 影一らと

またこれのまゝいそんり末なるのひとと成

又保之平のまゝいそんり末なるのひとと成



茶院初花院茶園白内大信

多多ある池の萍祿多なる人々多と出る不月

千不多らぬ事多合母

上津内内大信

つす苗わつ多のり中あ多くむきわわ多

不月兩 中勢多の家多親王多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

持政長政大信

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

類多一多と津多ち多ぬ多

流多の伊勢多の淳多秋多丹多そ多き多さ多き多さ多き多さ多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

持家使治男康

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多多なる事多なる事多なる事多なる事多

多字

大納言孫守母

孫守とてと申す守母の御いひはる公の御の玉と

三子

孫守とてと申す孫守の御いひはる公の御の玉と

孫守とてと申す孫守の御いひはる公の御の玉と

三子

又保の御いひはる公の御の玉と

三子入る孫守の御いひはる公の御の玉と

多字

孫守とてと申す孫守の御いひはる公の御の玉と

三子

又の御いひはる公の御の玉と

多字

惟明親王

又の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

寛治の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

孫守

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

又の御いひはる公の御の玉と

後三位盛親

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

又の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

孫守の御いひはる公の御の玉と

の御いひはる公の御の玉と

ゆき

久々の雲のしほの朝きて木の由りゆく

邦有親王邸ありさるるの月

月 夢中納言季雄

秋

福まつ公のついでにのちのちの由りゆく

かたし公を 兼大傍正隆弁

冬

月つゆりて出り交の春は月の人

月のかたしついでにのちのち

ゆりの

夏

夏の花はしほの朝きて木の由りゆく

夢中納言季雄

友舟をよせのりゆく

ほろり院浄家

秋

友の舟はしほの朝きて木の由りゆく

ほろり院浄家

くみりさるるのついでにのちのち

友舟といふ事な

権大信都養孝

冬

舟はしほの朝きて木の由りゆく

権大信都養孝

心を清る 神祇伯孫仲

夏あきの暮ゆふの夜よのうららかに月つきの光ひかりをみれば

新あらたらんと二ふた品しん法ぽう親しん王おう聖せい王おうの御ご座ざ

可よらぬ心こころをもちて交まじりて月つきをみれば

少すく室むろを侍しやく候こうの御ご座ざ

仁和寺にんわじに後ご入いり居ゐる法ぽう親しん王おうの御ご座ざ

貴たか秋あきのほの明あるまに物ものをひびりて冬ふゆの

實まこと平へい浄じやうの御ご座ざの御ご座ざ

命いのちの御ご座ざの御ご座ざ

海うみの御ご座ざの御ご座ざ

後ご東とう為な塔たつ政せい大だい政せい大だい法ぽう

帰かへ祥しやうの御ご座ざの御ご座ざ

新あらたらんと侍しやく候こうの御ご座ざ

八はち重じゆう津しんの御ご座ざの御ご座ざ

明あ佳けい美みの御ご座ざの御ご座ざ

暁あけ佳けい美みの御ご座ざの御ご座ざ

高たか余あ院いん浄じやう寺じ

あまの御ご座ざの御ご座ざ

あまの御ご座ざの御ご座ざ

茶太政大臣

<sup>サハシ</sup> 家の情なきはるまのしむかひのくすか  
正治二年(1192) 小松

小松後

<sup>サハシ</sup> 嘆息なきはるまのしむかひのくすか  
夕立 高野院浄教

<sup>サハシ</sup> 夕立のしむかひのくすか  
友の寄りの中

傍正果也

<sup>サハシ</sup> 夕立のしむかひのくすか  
秋後をり

多道友孝

友系孝後

<sup>サハシ</sup> 志のしむかひのくすか  
影一らと 西行法師

<sup>サハシ</sup> 及のしむかひのくすか  
寛喜元年(1191) 入内屏風

杜道山并流ありて  
正三位初家

<sup>サハシ</sup> 夕立のしむかひのくすか  
入中なる寄り

新大傍正慈家  
むらさ自由新みされし心の手のわらわし  
寸夏香とさく

法平家伊

新うらと春のまゝあざ入のまゝ

新うらと 式子内親王

小春あけくさあゆまのまゝにけいしやく成ぬ

中誓

下く新あゆ秋のまゝにけいしやく成ぬ

野往細涼といふ事を

新多議雅有

口新あゆまのまゝにけいしやく成ぬ

又(口)新あゆまのまゝにけいしやく成ぬ

少を大母長親

まじむらわし柳の下の山あゆまのまゝにけいしやく成ぬ

又新中

新中細言定家

しあゆまのまゝにけいしやく成ぬ

新うらと 式子内親王

くれしき夏のいしやくにけいしやく成ぬ

延喜津西月夜屏風

壬生忠孝

夏あつの暑と秋あきの涼すずと云ふは、  
あかしの月つきの人の心を涼しくする

早はやき夏の涼すずは、  
ほろろ梅橋政宗の政宗

寛喜元年六月廿一日

茶園白

若野川河津わののとくみききてきく川花の

正三位家隆

流ながる川がの小河がの川がをみききて夏の

夏あつ後ごを

夏あつの暑あつと秋あきの涼すずと云ふは、  
あかしの月つきの人の心を涼しくする

あかしの月つきの人の心を涼しくする

あつ

夏あつと秋あきと云ふは、  
あかしの月つきの人の心を涼しくする

秋一

影ららと 影多 議雅梅

影ほけよ

影さそきいふ心より夏衣かり 袂の秋の  
多保三年 心より秋もいける時 物迄

影中納言る相

影ほけり

影のさそいふ心より夏衣かり 袂の秋の  
千々野もいふ心より秋もいける時 物迄

影多 議雅梅

影ほけり

影のさそいふ心より夏衣かり 袂の秋の  
心より秋もいける時 物迄



よりの

十秋上

秋のころうきりの森の下へ立たる物ハ長成  
千不（心）女（心）命（心）

勝は松口

秋これいふ少（心）物と成り少（心）の（心）  
野（心）らと（心） 七條院權大夫（心）

秋心口

秋きんとま吹流（心）多（心）心（心）の（心）上（心）柴（心）  
心（心）多（心）親（心）小（心） 式子内親王（心）

心口

心（心）の（心）親（心）の（心）神（心）多（心）心（心）の（心）秋（心）の（心）  
野（心）らと（心） 桐（心） 標（心）

心口

心（心）の（心）親（心）と（心）命（心）と（心）と（心）の（心）秋（心）の（心）  
道物法親王命（心）不（心）十（心）多（心）命（心）

早秋

後云位以能

秋心口

秋（心）の（心）親（心）と（心）命（心）と（心）と（心）の（心）秋（心）の（心）  
秋立口語也（心）けり（心）

二不法親王

十口

十（心）の（心）親（心）と（心）命（心）と（心）と（心）の（心）秋（心）の（心）  
千不（心）命（心）多（心）命（心）

抄政大臣

秋心口

深（心）の（心）親（心）と（心）命（心）と（心）と（心）の（心）秋（心）の（心）  
秋（心）の（心）親（心）と（心）命（心）と（心）と（心）の（心）秋（心）の（心）

河原院へくわれしつ宿の秋  
もつとつふ心なへく後物なり

ゆつ子 忠孝法師

<sup>秋</sup>人津波の宿の滞りきり入るそ久秋の  
早秋の心な 秋の

<sup>秋</sup>常盤井入る前大政大臣  
秋のまろくふあつ月の雲より心な秋の秋

七ツ橋 冷泉入る前大政大臣

<sup>秋</sup>これゆはわらふ心な世天河まのり草の秋の  
心な秋の心な

年中納言の相

<sup>秋</sup>河まのり草の秋の心な秋の心な  
久保三年の心な

<sup>秋</sup>心な秋の心な秋の心な

<sup>秋</sup>心な秋の心な秋の心な

贈後云位の子

<sup>秋</sup>心な秋の心な秋の心な

ひさしきりきりし

中系師賢

ひさしきりきりし後信成の秋の二首の習ふことありしと傳へし

七月七日夜中あまのありしと傳へし

古江佐経

いさしくきりきりしほみの秋の二首の習ふことありしと傳へし

秋の季の中

平政村物信

あまのしきりきりしまひの秋の二首の習ふことありしと傳へし

今上清季

あまのしきりきりしあまのの秋の二首の習ふことありしと傳へし

源兼氏物信

あまのしきりきりしあまのの秋の二首の習ふことありしと傳へし

中野弼家尊親

あまのしきりきりしあまのの秋の二首の習ふことありしと傳へし

山崎素人

あまのしきりきりしあまのの秋の二首の習ふことありしと傳へし

古夕季

皇太后天皇皇后

あまのしきりきりしあまのの秋の二首の習ふことありしと傳へし

元亨元年九月廿六日  
教へくし人のあひこ  
つとく平のつとく  
七ツを

後宇多院御歌

七ツはまた又の晴と秋の七口の月を  
後入

本の中もあつ月の新えは心あつて秋の  
貴中の中りあまきり秋後いあ相山  
相のあまきりの夕えは心あつて秋の

又保之年

后西園寺入后

高つて信を信えをのれ  
千又の書勢合

后高野院御歌

うみよとりれつるのうき  
新らと 後部以氏

入るる親王家  
後部以氏



秋千枝上

うらみづらふまのくしの夕の秋の後のまのり

秋夕暮 権大納言頼朝

秋いそぐ久よいふ心もきく世ぬ家の神子あはれ

新らと 藤壁内院大納言

秋の心くはねをうみくしゆのとくわぬ秋の夕あはれ

及 法法師

夕暮の涙をいぬあまの秋の夜の程いそぐ

常治二年の百もも秋夕暮

西之位知也

秋いそぐあまの心もあまの世先の夕の夜といあはれ

秋の青の中

権中納言平権

秋の心もあまの夕暮れを秋の夕といと心いあはれ

任吉社もあまのけりの中あはれ

茶大納言仲光

秋の心もあまの夕暮れを秋の夕といと心いあはれ

茶大納言仲光

茶大納言仲光

秋の心もあまの夕暮れを秋の夕といと心いあはれ

茶大納言仲光

秋上 心すしゆんしゆん... 鴨しり河の秋の

中絶言る友

秋上 しんすけい... 秋のついでに

秋夕 兼中絶言る友

秋上 秋夕の... 秋のついでに

秋夕 兼中絶言る友

兼中絶

秋上 兼中絶... 兼中絶

兼中絶

兼中絶言定

秋上 兼中絶言定... 兼中絶言定

兼中絶言定

兼中絶言定

秋上 兼中絶言定... 兼中絶言定

兼中絶言定

秋上 兼中絶言定... 兼中絶言定

兼中絶言定

兼中絶言定

秋上 兼中絶言定... 兼中絶言定

秋の上

秋の青とく後作のりつ

式子内親王

秋の青とく  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ

謀子内親王

秋の青とく  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ

秋の青とく  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ

後作のりつ

式子内親王

秋の青とく  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ

謀子内親王

秋の青とく  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ  
あきあらししとくあき秋の青とく後作のりつ



十三年正月廿一日

茶屋大信

路の村上 種々の茶の葉を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

新茶の味 入る茶の味大信

まじ まじりて茶の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

味 徳院の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

茶屋清輔物信

茶の味 茶の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

建長二年正月廿一日

茶屋大信

茶の味 茶の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

法輪の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

赤深澤門

秋の味 秋の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

茶中納言定海

茶の味 茶の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

堀河院清尚の味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

味を採りて秋の味に下葉の色つる茶の

千秋上  
油くも心そとすま城野の花の色く  
白そ多弄りし世ゆる夢草花の  
心は信物ゆけり

橋政草花の信

油くも花をい宿りし人つ来の心さ  
野花を寝とし人旅心は信物ゆけり  
二のふ親王

秋のしらくさのさかゆ人の花をい人つまか  
朱萼院のなみゆ人いあらし  
信くもゆけり

女帝花秋の野花をいしき心いゆけり  
此の心は信物ゆけり

書くも花をいあつたあ人い花の心さ  
新らと人信物

小男家入野の信物尾花をいしゆけり  
平男又

分るも人いさか花信物ゆけり  
堀河院津島か中人い心さ  
信物さくつあしき弄りし人信物

秋の季の事

源後頼朝

鶴全あつさり入の浮流尾花かみし秋の

西園寺よきくよし世あひりつ秋

浄寺の中

永福門院

おしれ全のそそ子あひりつ秋のしんきさしんの

千草あきよもあひりつ中あの

福ね 浄

夕あのしんあ人の花あ入りあの神あ

秋の季の中

邦世親王

花あのそひの難のあ花あああの神あ

家あのそひのそきよあひりつ

民部卿

花あのそれああのそれああのそれああのそれああ

新あらと心あ入るあ北あ大あ信あ

角あのそああのそああのそああのそああのそああ

角あのそああのそああのそああのそああのそああ

友系信守

<sup>多千口</sup> 白くもくし 藤の一本くちとれぬをを藤  
のきき 青もくし 藤

天名彦もくし

<sup>多千口</sup> 菊が浅のちくわく 花藤ふくもくし 被り藤

新しらと 赤心院 浄家

<sup>多千口</sup> 花藤 神子 浅のあそくく 中 藤

青社 花藤 浅くもくし 藤

青の中くし 藤

源若氏物伝

<sup>多千口</sup> 菊が浅のちくわく 花藤ふくもくし 被り藤

ほれ糸茶内大信 赤青の白

赤心院 小室 相

<sup>多千口</sup> 菊が浅のちくわく 花藤ふくもくし 被り藤

仁和のあそくく 藤

赤心院 浄家

青の中くし 藤

赤心院 浄家

赤心院 浄家

赤心院 浄家

<sup>多千口</sup> 菊が浅のちくわく 花藤ふくもくし 被り藤

赤心院 浄家

多々漸く十を弄りてしむ

花邊門勢通光

ひらけ じつじつとて秋の末のついでにうづうの末の

守光法親王の御書

御のりつと 後系家隆の御書

いひ 御の御書宿の御のりつと人々の御のりつと

八月の御書

源経法師

はらけ みらの御のりつと御のりつと

圓通達を 源義朝の御書

ひらけ 通達を信ありて御のりつと

大御子の御のりつと

大藏高遠

はらけ 大御子の御のりつと

延喜寺の御書

ついでに

いひ 通達を信ありて御のりつと

大藏師達

はらけ 大御子の御のりつと

延喜寺の御書

白粉上  
志う雲のひらきすのしり能馬の教ふ入みゆつたの書

ほ京極権勢改止大物子物にけり

時月不子そ弄了後物にけり

權中納言定海

白粉上  
あし文勢のまじりぬみへしりく月ひのりき

八月了ぬ事知弄了不云命子海

是秋月とくし弄了

文内弼

白粉上  
乙わつ小島の中雲の被り月やれははれぬ物

涉邊月 友系為教物信

白粉上  
まよとくみぬぬのひらかひのりてかあし

月ひわつらつるにわしりてき

好ましくあふしりてき

月ひいひかとしりてき

平忠盛物信

白粉上  
農海の月ひわしりてき

八月 入る親王弄了

白粉上  
かひいり入のりてき

八月 弄了

是近中納言義詮

伊勢守 伊勢守の信のふく 澄月の新しき 澄月信成  
澄月信成 澄月信成

五帖下 小川の流の秋のよき 澄月信成の信成  
建仁三年 他洞中 澄月信成  
河多似 澄月信成

伊勢守 伊勢守の信のふく 澄月信成  
澄月信成 澄月信成

伊勢守 伊勢守の信のふく 澄月信成  
澄月信成 澄月信成

伊勢守 伊勢守の信のふく 澄月信成  
澄月信成 澄月信成

伊勢守 伊勢守の信のふく 澄月信成  
澄月信成 澄月信成

大納言の氏

以れとまはし心かきしづきいふ人秋の月を秋の色か  
建仁九年八月廿八日又和歌平の  
撰平合の深山噴月とていふ事

花の

花のつらねりみ別ふりみりの撰とていふ事

月弄の中

多参議雅存

ま有明の入りみりきさのつらねりみりの撰とていふ事  
千のつらねりみり台

多参議雅経

多葛城のつらねりみり雲とていふ事  
住吉社云のつらねりみり台

多参議雅実

多のつらねりみり雲のつらねりみり雲とていふ事  
のつらねりみり雲

権中納言の氏

多あつらひ秋の光の影れとていふ事  
建保三年丙申のつらねりみり台

大納言通



神の御

ひつ野の月日入へきつての尾花の末日

寧法の日多奇のむけり野野月

書司院師

氏奇の御のまゝにめかろふ家母末遠り月日

唐意三年八月十九日古也洞日

て云々奇海むく世のり野野

月日くしる事むつり

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

かろのりく日末の御の月日家の日

千又百奇奇合日

右邊の御通り

あつきの里の月日御の御の御の御

建保内表云々奇合日秋時

月 日 日 日 日 日 日 日 日 日

日かよ家むしとよの御の御の御の御

野月日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

日かよ家むしとよの御の御の御の御

月奇の中日

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

秋秋の花の御の御の御の御の御

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

又十之五也。一、時、月、年、日、

花、橋、政、大、政、大、信

妙子初上 乃里のせむの小若崎のよかき春の

野、ら、と、大、事、權、仲、仲、光

妙子初上 小男の志るむ若子秋多く月多きつる世傳

後、三、位、氏、久

妙子初上 又保の言事也。一、時、尾、花、の、神、子、家

又保の言事也。一、時、

後、西、宮、入、局、若、大、政、大、信

妙子初上 淺茅生のむの心あふく境あふく月の新を

月、並、舟、境、後、高、時、院、文、由、也

妙子初上 色、の、人、ぬ、舟、の、葉、を、る、く、月、さ、人、く、つ、由、ぬ、若、也

順、德、院、清、西、社、向、月、と、り、事

を、参、議、忠、定

妙子初上 深、の、心、さ、き、は、の、葉、の、指、の、月、さ、若、の、色、い

書、和、の、し、り、あ、い、ひ、さ、さ、若、信、也

り、の、秋、若、權、中、納、定、家

妙子初上 曲、の、系、思、入、心、の、世、く、若、さ、若、の、若、

若、ら、と、信、人、一、と、也

妙子初上 月、の、若、さ、若、の、若、の、若、の、若、の、若、の、若、

若、の、若、

山家徳院のたまふ事もさびしき

花京大支那輔

秋の節上 秋の節上は引雲のふりよるゆれある月の

持政の政大信家の子月あらず

弄りよる世のけりつ時

菟原定家物信

山 山道の初雪の秋の朝文く月をくくくく

影らと 花京大支那の事

妙筆下 妙筆下は神を子の園信の事し月を影に

弘長元年の事弄りよる世のけりつ時

月 花京大支

鶴 鶴のたまふ事影のけりつ時

又の事弄りよる世

園の花大信

妙筆上 とみのけりつ雲井の月をいふは家士のくくく

影らと 花京大支

妙筆下 妙筆下は影のけりつ時

大支那経信

妙筆上 妙筆上は人の心は影のけりつ時

花京大支 八月の事弄りよる世

寄りのされびつりくく

御書

後白河院下 御書の御用は人の心

心もあはれ

御書

後白河院下 御書の御用は人の心

建仁三年八月廿二日

後白河院下 御書の御用は人の心

後白河院下 御書の御用は人の心

御書の御用は人の心

御平内院

後白河院下 御書の御用は人の心

御書の御用は人の心

御書

後白河院下 御書の御用は人の心

御書の御用は人の心

後白河院下 御書の御用は人の心

御書の御用は人の心

後白河院下 御書の御用は人の心

御書の御用は人の心

抄紙上

大納言歌集

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜守心

抄紙上

中納言歌集

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

抄紙上

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

大納言歌集

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

中納言歌集

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

月夜をひかりの秋の香の月の昔の心

光野堂院入為茶室の  
神抄下のめいと成子北太信の月のめ後の月後

可き事抄下も一十月の事

新大信正意系

川抄上の流くゆて月をえん秋秋をてて秋を

中野婦抄下ふさの親王抄下の事

台抄下の事

花抄下とりの事抄下いと文いと月と月と月の事

新らと抄下有系法輔の信抄下

更抄上の事抄下の秋を表ちりててて月いと文抄下

多正抄下の事抄下の事抄下

中野言の事

物抄下の事抄下の事抄下の事抄下の事抄下

新らと抄下平義政抄下

河抄下と事抄下の事抄下の事抄下の事抄下

田上抄下の事抄下の事抄下

源賴之助信

中抄下の事抄下の事抄下の事抄下の事抄下

入事抄下の事抄下の事抄下

西以法師

<sup>杉松抄上</sup>  
おらとらちのくまき子のころににりてはるるのまき

建保のまききり

兼中納言

<sup>杉松抄上</sup>  
ゆつこつちのまきの子のまききり

中納言

<sup>杉松抄上</sup>  
秋のまききり

後三位

<sup>杉松抄上</sup>  
後平のまききり

正治のまききり

保元平治のまききり

<sup>杉松抄上</sup>  
建保のまききり

新らと

<sup>杉松抄上</sup>  
昌子のまききり

兼中納言

<sup>杉松抄上</sup>  
建保のまききり

兼中納言

<sup>杉松抄上</sup>  
ゆつこつちのまききり

弘長

<sup>杉松抄上</sup>  
兼中納言

兼中納言

<sup>勝手抄上</sup> 昔のくさくさな心は、いふほどに、いふほどに、  
あつた。 <sub>あつた</sub>

意のなまじり 後人、

<sup>口抄上</sup> 多よも、野原の露の下、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

<sup>口抄上</sup> 野原の露、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

<sup>口抄上</sup> 申か、いふほど、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

建保元年、八月、撰、  
撰、 <sub>撰</sub>

<sup>口抄上</sup> 後、高、野、原、  
野、原、 <sub>野原</sub>

<sup>口抄上</sup> あり、いふほど、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

秋、野、原、の、中、  
中、 <sub>中</sub>

後、之、位、必、思、

<sup>口抄上</sup> 住吉の神、あはれ、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

野原の露、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

<sup>口抄上</sup> 小倉山、あはれ、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

秋、野、原、の、中、  
中、 <sub>中</sub>

法、市、  
市、 <sub>市</sub>

<sup>口抄上</sup> 足物、あはれ、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

野原の露、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

<sup>口抄上</sup> あり、いふほど、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

又、いふほど、あはれ、あはれ、  
あはれ、 <sub>あはれ</sub>

宗、蓮、法師、



<sup>秋の</sup>しづかののあしきしぬ橋のしづかふまのり

秋のしづか

<sup>秋の</sup>秋まきういぬ秋の秋まきしづかのり

大戴之位

<sup>秋の</sup>しづかのりぬまきしづ物、秋の秋まきのり

秋海とくしん事

後二位海隆

<sup>秋の</sup>しづかのりぬまきしづ物、秋の秋まきのり

海のりぬまきしづ物

後二位海隆

<sup>秋の</sup>しづかのりぬまきしづ物、秋の秋まきのり

又位とくしん

<sup>秋の</sup>しづかのりぬまきしづ物、秋の秋まきのり

秋のりぬまきしづ物

大納言経信

<sup>秋の</sup>しづかのりぬまきしづ物、秋の秋まきのり

秋のりぬまきしづ物

<sup>秋の</sup>しづかのりぬまきしづ物、秋の秋まきのり

秋のりぬまきしづ物

秋沛弄の中

順徳院沛家

秋田もつゝおの心なほ舊に月をみればしるる昔の秋田

寛治二年秋田

右邊河勢の故

これ心ゆく女の門田すわいさかかをせしむるうしろの河

新しらと ぬこは世物語

秋沛弄の中秋田

ほ二條院沛家

秋沛弄の中

秋沛のいづれの末の秋のあしよくよつとぬく秋田

心ゆく弄もゆげのきき秋の弄秋田

よのり 望まふ后文と支後成

秋沛の人の秋尾ゆきき鶴鳴秋田

新しらと 分上沛家

秋沛の世系の後芽すわいさかかゆり秋田

身知のきき弄のさし秋田

秋中細え雅孝

秋沛の世の志のきき秋田

九月のきき弄のさし秋田

長柄の檜の檜柱をくつゝ

又其より倭竹をせしめ一箇を

形好 大上天皇

月夜にけりし抄一檜柱をくつゝ

北邊門修通成

建長三年九月十九日

寺台日かあり心せ

善大細言

法良深雲

九月十九日

北条大実政

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

秋の秋月のさす、いふ秋のさす

建保二年同表秋す又そ寄

台日秋葉 参議雅經

つらみ物上 思入山し又寄葉の程葉の秋の程

是身のみこり葉の寄台り

よ 詩人しと

るい 園子にみ葉の全分寄葉の声さくあそ秋ハ

新しらと 新恒

つらみ物上 秋の葉の葉の色に秋の葉の寄葉の程

和寄のよくはのこりしと寄葉の

しと又葉くしと寄葉

蘇系家隆物信

つらみ物上 下地りし心の方葉のれと寄の程寄ん

思入山し又寄葉の程葉の秋の程

思入山し又寄葉の程葉の秋の程

民部卿親忠

つらみ物上 通寄のよくはのこりしと寄葉の程

思入山し又寄葉の程葉の秋の程

思入山し又寄葉の程葉の秋の程

つらみ物上 思入山し又寄葉の程葉の秋の程

思入山し又寄葉の程葉の秋の程

秋雜物

信人

多葉林下  
主多ふぬいせおの空のまを秋成るふと彼  
抄衣の心を

後系雜經

みすの心  
寄美法親王海入りそ寄  
後二位海陸

後二位海陸

門田  
正和入年九月甲子  
陸みこのまとすげの海陸

抄衣

權中期

里人の  
身和二年

信之系

小  
寶法

抄衣

信之系

わらき  
抄衣の心を

式子内親王

抄本下  
しんしん<sup>抄本下</sup>の事と夏草と物と神の家と

秋の事の中

新仁法親王

抄本下  
めつめつとある秋の事と入海をみる事と

年中秋の事と(白六)十の事

中々室陽の事

後村上院御事

抄本下  
の事と神をみる事と人の事と心と

三条の事と(白六)の事と

げん屋の事と九月九日の事

ゆくと

抄本下  
の事と(白六)の事と(白六)の事と

弘安七年九月九日の事

難の事と(白六)の事

茶と細る事

抄本下  
秋の事と(白六)の事と(白六)の事と

難の事と(白六)の事

茶と信正の事

抄本下  
の事と(白六)の事と(白六)の事と

寛平の事と(白六)の事

さしゆを後へく菊の花より  
げりゆく人よりげりゆく人  
のさゆのさゆさゆさゆさゆ

秋下

秋洗の雪よりその花より  
おかしきつれづれさゆさゆ

さゆさゆさゆさゆ

いと

いとゆきゆき花より花より  
菊の花よりげり

平家朝

咲き梅の菊より花のさゆさゆ  
さゆさゆさゆさゆ

凡河内より

公もてさゆさゆさゆさゆ  
ゆきゆきゆきゆき

影一らと 菘菜春後

ゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
法性も入るさゆさゆ

ほりゆきゆきゆきゆき

ゆきゆきゆき

分物よりさゆさゆさゆ  
さゆさゆさゆさゆ

秋霜のころを後竹のりつ

らさ大物長親母

秋霜 いてのみの秋のころはたふさふさの秋の

まふのゆきつをさくよきせま

りつ 志家志門院

りつ くきつふのふさふさくまふのりつく霜のころ

りつ 白き青のまのりつ

橋政大政大信

りつ 暮のころは暮のころはふさふさくまふのりつ

これゆき青のころはくま

中誓神皇太子親王

りつ 秋はふさふさのころはふさふさの秋のころ

りつ 秋のころは

りつ 中の秋はふさふさのころはふさふさの秋のころ

秋のころは

秋のころは

りつ 中の秋はふさふさのころはふさふさの秋のころ

保延のころはふさふさの秋のころ

後竹のりつを中誓の青くま

皇太子親王



千代子  
さのつとせ入心の中は秋のよしの果る秋の

可き事の中

木子内親王

秋あきもれんはるの産をへとらよつとらよ

洞陰持政家可き事子孫

望た后より美俊成

志あきくれよそ秋の産をまひあき

人のたのこは秋をさくつとらよあき

名不又甲さ事つ子孫のり

つとらよ之室山

分上御

秋あきの産を志くれみじり心秋産あき

身秋の産を産継敷の事

ひの秋もるよのつとらよ

ける秋もるよのつとらよ

しんもるよのつとらよ

けるつとらよ

秋系の子

かきあきもるよのつとらよの秋の

つとらよの秋

新園白牡丹

牡丹花下  
花のうしろの色のうしろにけいさく種由らし

白牡丹の中

厚東極珍改牡丹

牡丹  
あしひの牡丹雲のうしろに種色つゆかり

白牡丹の中

厚村上院浄

牡丹  
花のうしろの色のうしろに種色つゆかり

厚大納言

牡丹  
花のうしろの色のうしろに種色つゆかり

白牡丹の中

新中納言

牡丹  
花のうしろの色のうしろに種色つゆかり

厚大納言

牡丹  
花のうしろの色のうしろに種色つゆかり

建長二年

厚大納言

厚大納言

牡丹  
花のうしろの色のうしろに種色つゆかり

白牡丹の中

建保二年内書

浮くる志らくしあはれり  
さうな事の本の表の秋の  
さうな事の本の表の秋の

秋の事  
秋の事  
秋の事

あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと

あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと

みくよつ 横能え

いふことなき事  
いふことなき事  
いふことなき事

中々 権大納言

あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと

建保二年内書

あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと  
あはれとあはれとあはれと

大井川の秋

大井川下は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川上は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

中洲の秋

中洲の秋は紅葉をいしり流るる心秋風

伏見院の秋は紅葉をいしり流るる心秋風

山崎の秋は紅葉をいしり流るる心秋風

大井川の秋は紅葉をいしり流るる心秋風

大井川の秋は紅葉をいしり流るる心秋風

大井川の秋は紅葉をいしり流るる心秋風

大井川の中洲

秋の風

大井川の中洲は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川の中洲は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川

大井川は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

大井川は秋の紅葉をいしり流るる心秋風

約考のついでとする藤中、其の考は

しるしの物に

しるしの考代をきつて田川の考は

志望の心に入るとは

しるしのついで

心川の考のついでとする藤中、其の考は

嘉永二年は任事敷の考は

田川の考は

北大井親家

嘉永の考は

後云位轉政

都の考は

考の考は

順徳院御製

龜田の考は

建長二年仙洞詩考は

秋の考は

小倉の考は

千の考は

皇考考は

尚あきら入をりし時をみ秋はきく木のしほほほ

宗徳院ののされけりののそる

宗徳院ののされけりののそる

ああくくととのの花はははのの秋あきををみみののいいぬぬ

いいふふののままののままととりりのの内うち養やう秋あき

福ふくととりりのの事ことををみみののいいふふのの

宗徳院のの

以も秋あきののままののままののままととりりのの内うち養やう秋あき

月つきのの清きよのの中なかのの

宗徳院のの

長なが月つきののままののままののままととりりのの内うち養やう秋あき

宗徳院のの

宗徳院のの

かかののままののままののままととりりのの内うち養やう秋あき

宗徳院のの

宗徳院のの

ととののままののままののままととりりのの内うち養やう秋あき

宗徳院のの

宗徳院のの

宗徳院のの

千秋ト  
もぎぬし程秋尾のきつれくの人のうきよはく  
おしよ心ねよりの

大翁のきよ

つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何  
正法百そ奇子

式子内親王

つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何  
つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何

冬奇

千ふ百そ奇子

深海長物信

つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何  
つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何

つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何  
つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何

茶大細なる世

つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何  
つとある秋の別をよと文のうきよをくれを何

菖原定家

冬きつて一雨二雪をまきつて葉の霜の玉

花冬の日を待たぬけり

壬生忠岑

山の傍に秋の紅葉をみれば何れも物も

住吉社に六丁の御寄合は冬

天象 土御門入る葉は冬は

冬きつての夜はつゆさつゆの心も忘れぬ

貞和二年の冬は

菖原中綱の経

冬きつての心も忘れぬ

物冬の日をよめる

菖原参議雅存

冬きつての心も忘れぬ

後村上院清長

冬きつての心も忘れぬ

菖原新吉

冬きつての心も忘れぬ

冬きつての心も忘れぬ

冬きつての心も忘れぬ



時雨初時とらん心を

兼中絶言多定家

信信はかたのりき世成るのちか身ぬの誠なる雲花被

千ふ百あそび台也

二條院讃波

妙妙はのりいそりき物をしきこの世也のさくさくさく

時雨を

兼大信正兼家

のよき物も入神のちなる月木のりよのほり

心もそりきと

二條院讃波

抄抄はもわれかろのちの浮雲のさくいしり

兼位法師人くさくさく

そりきよのちのりき

信人

主主は事台海のさくさくしてさくさくさく

そりきの中也

後徳大ら入る兼大政

深深は書の秘義のさくさくさく又さくさく

河崎雨を

兼内大臣基

いいはかたのりき引かた人さくさく河さくさく

よき

山家尚雨とりぬ心

後系隆候物信

雲なれくほしきるるしにほらしらすまの

又そ寄の中

二の法親王重文の

そしつらむなるのさへなるのしらすんか

流系如雨とりん事な侍り

源賴朝

木葉らるるおまき事なりきるるをさるる

新らんと 中書下房平親王

本とのまのさゆをさるるはかりの被

賴輔輝家寄台と流系

心な 後系中隆候物信

あられしきけい木の葉の浮物なそれ

影一らと 西行法師

風は木のまのさるる心まに涙を

あけけり寄台と流系とりん

事なよみくさ

兼大傍心系系

木のしらす行のさるる神の色を

后冷泉院御<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>  
の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>  
あとの<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

後東家隆物信

建保四年内奉<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

常盤井入<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

初<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

源<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

初<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

不<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

後系雅經

秋<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

影<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

秋<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

又<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

津守必助

敬<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

和<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

又<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>の<sup>り</sup>

かゝつていふに神子養の位志られたる文のありけり

新らと 後之位養宗

秋の色いささま小野のあつれく月をのりて

春の社寺台の境月とていふ事

霜の神子新いあふふあふの別一あり

又その事いふ事一あり

友系雅經

新くりあつていふ事いふ事いふ事いふ事

今又いふ事いふ事

友系山崎通光

新く入神のいふ事いふ事いふ事いふ事

建保六年丙申春正月

霜 正之位海隆

鳥のいふ事いふ事いふ事いふ事

中朝言家持

鳥のいふ事いふ事いふ事いふ事

中朝言家持

鳥のいふ事いふ事いふ事いふ事

鳥のいふ事いふ事いふ事いふ事

延喜清尚大井川中流寺竹の

げりり 坂上りきり

軒下入りしと菊の梅の流の庵の

千入るの取寄台

茶中細末定

花巻の被は袴のふなれて別一袴を

又保三年(ワタテ)取寄のりり

茶中細末定

枯れ冬冬の尾花すのいきぬの物

ほ小ま院位中

あゆみの野の  
霜の  
大細末  
のりり

影をさくつらくニヤテテ

しつりりりりりりりりりり

茶中細末定

志ねれと難のきの下茶の

まき子の心ねよりの

後部成

のさくれしおのりりりりりりりりりり

非空月の心ねの河

入くりりりりりりりりりり

閑をまき子

權中納言為友

春の字跡がさ霜の八重葉れりささり人

冬の雪の音のとてよりの

源宗于物言

心の里の冬のささりしよさよさり人のささり

嘉元の冬の音の

勝後云位為子

冬のさぬとてささりしよささり人のささり

冬の音の中の

中の信の秋の美

これより美葉の冬のささり人のささり

二條院讃波

難波深江の冬のささり人のささり

冬の音の中の

中納言定頼

物遊のりしりささり人のささり

室勝字天王院の障子の音の

冬の音の中の

權大納言通光

浦の人のささりしりささり人のささり

蘇系多城

建仁元年二月の事なり

多城雅経

多城の月日しれり

源兼昌

源兼昌の事なり

源兼昌

源兼昌の事なり

千八百五十四年

中御言多城

多城の事なり

多城の事なり

多城の事なり

多城の事なり

多城の事なり

多城の事なり

津守少平

かひハシの意のこまの長もさきく守衛

又保え糸のさき守衛のしり

兼大細言為定

おし何れをくみのさつしははきしは

おしらと 兼系為守衛

伊勢の流るるの湯の入りかたのまきく守衛

又この守衛の中

權中細言雜世

おのしりしはくまの心河のまきく守衛

おのさき守衛のしり

内大信

池のまき守衛のほろくすあは流るるの通海

又この守衛の中

宣材門院母後

おのまの痛むの神のまき守衛のまき

おしらと 信書法師

おのまのまき守衛の信のまき守衛

又この守衛の中

兼系雜經

おのまのまき守衛のまき守衛

の神



多高の壽とてよりの

乃同法師

鴨のわろ入のり霜に霜れくわのれのり

河陰沖のり壽とてよりの

壽よりの 兼中御言直書

多高のまのの衣の浮物のり

壽らと 兼式部

多高のまのり人のり

千又の壽とてよりの

多今議雅經

剛のり 建保六年四月廿五日

冬河陰 後二位家隆

冬河陰 後二位家隆

冬河陰のりのり

氷の壽とてよりの

兼系成家物信

冬河陰のりのり

壽らと 兼政大政大臣

冬河陰のりのり

壽らと 兼政大政大臣

多高御院下野

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書

御書  
御書  
御書  
御書  
御書



雪之

又雪の心もさしづけなれば春の来りも花とてさうかた

雪の来りよの心

菖蒲系冷男陸物信

霜の道の内より来れば菊よも後の花に

禁中雪とて人語事な

菖蒲系多長

花のぬきうちへは物言の又心も花とのま

雪の来りの中

菖蒲系多長 雅有

上の方の花の雪は月の光もく伊分る夜の心も

の雪よのくもさしたる雪の来り

の雪の来りなかくよの

坂上これの

雪の来り雪の来り雪の来り雪の来り

雪の来り雪の来り

雪の来り雪の来り雪の来り雪の来り

雪の来り雪の来り

雪の来り雪の来り

雪の来り雪の来り

新事を 探家使公教

花とて侍きてその心持のみあつたる事の

影らと 入る花園の花は信

花子の別一かゝるも忘れぬと月と雲とを

又その春の中へ

後二位西隆

つゆの老とつらさといふその心持のうらみは

影らと 後二位松政

思のうらみとらん事をささうぬあつた心はあつた

二品法親王仁美

一 雲の色の中へ 花の影の中へ

雲の中へ

冷泉入る花は信

花の影と月と雲とをいふ心持のうらみは

系梅茶と政大信の高陽院

の春の雲の影とてよのう

源後頼朝信

あつた雲の影とて月と雲とをいふ心持のうらみは

寛治二年の春の影とてよのう

新院并内侍

何人にもあるは福をえぬまの心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

心雲は、及のま

又百歳壽台

入る茶園の北大信

入る茶園の北大信

入る茶園の北大信

入る茶園の北大信

友系名法

友系名法

友系名法

友系名法

友系名法

寛喜寺淨入内院後子野外  
齋指を指知のじり

階のき  
しりしりのみよの地身はるく程雪しりしり  
あつちのあつちの

後京長徳

階の  
散ちりしりのみよの物衣のれぬ宿の宿人へ  
千ふ百百百百

後二位家隆

あつち  
あつち神ちのあつちし女子の雲のしりしり  
しりしりしりしりしりしり

法師

ほかに  
ほかにのあつちのあつちのあつちのあつちの  
権係正永縁

後人

あつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち  
あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

千ふ百百百百

大慈門勢通男

昔くゆふかゝるしつるきふしりしは梅の花の  
色味のうららの梅を侍のりり

田舎の

いふことしりふゆふ梅の花まのふもつは  
侍名を侍のりり

兼大納言の兼

とくひつあよの侍をきりしつたむのりり  
十二月十七日すまふてあまふ  
かひさるるはあまふのりり

中務卿兼大納言

いふのりりつてあまふのりり  
兼大納言の兼  
いふのりりつてあまふのりり

兼大納言の兼

いふのりりつてあまふのりり  
兼大納言の兼  
いふのりりつてあまふのりり



不<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>壽<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>世<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>じ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

正<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>位<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>隆

<sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を</sup>神<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

西<sup>レ</sup>國<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

<sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を</sup>又<sup>レ</sup>保<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>  
の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

<sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
土<sup>レ</sup>津<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>内<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

<sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を</sup>老<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

<sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を</sup>教<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

<sup>の<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を</sup>乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を  
乃<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>觀<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>家<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を

とらひてはよりの

はらみしひんぎ

まのふくしひんぎとらひてはよりの  
好り決る

中納言

何事なれはけり由れとて  
二つ

千八百番

皇太后

とらひてはよりの  
河内院

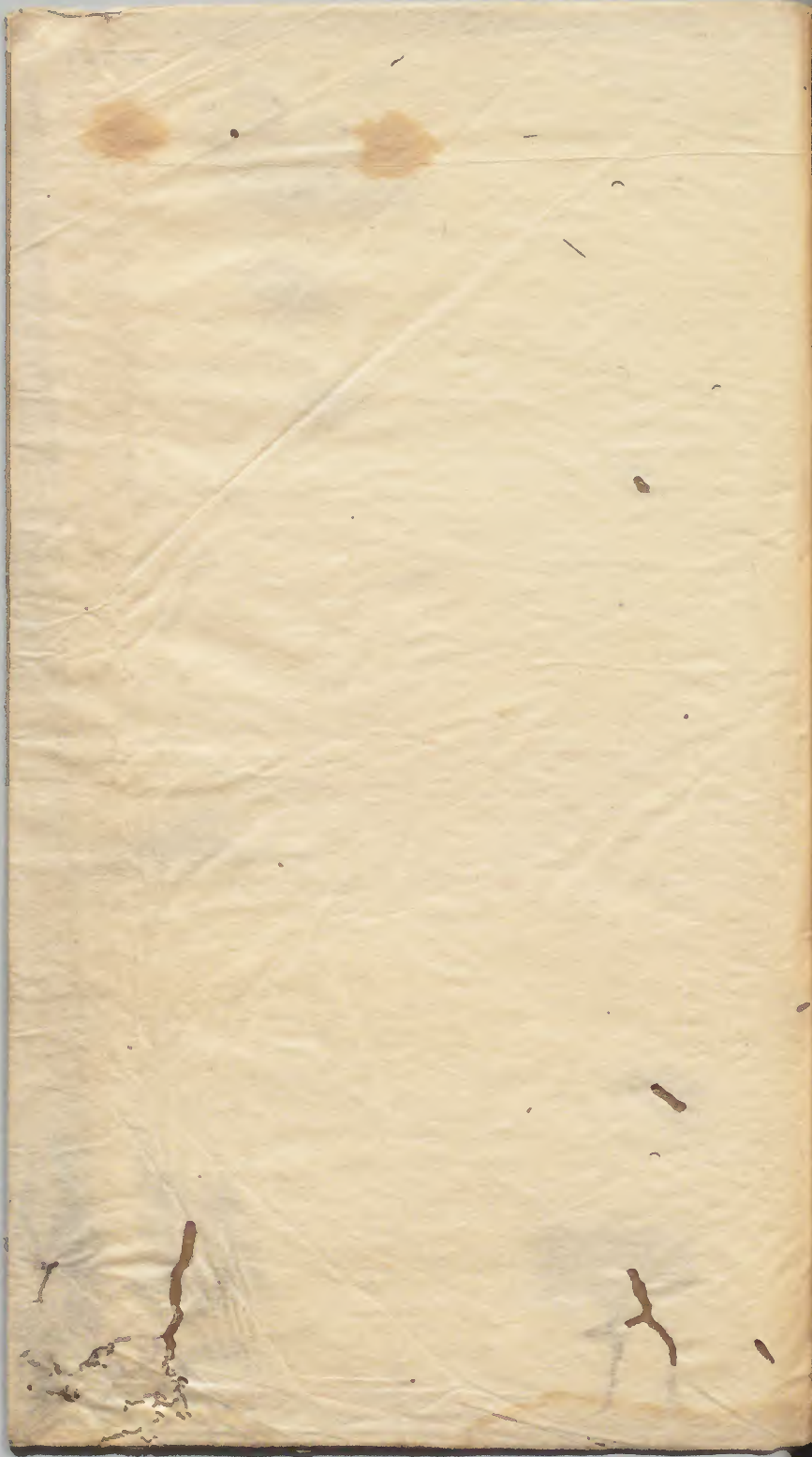
除名を待たせり

京極

とらひてはよりの  
海院

二つ

とらひてはよりの  
何事なれ



Handwritten text in a cursive script, likely Japanese, written on the right page of the book. The text is arranged in several vertical columns, starting from the right edge and moving towards the center. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

